

まとめ

多様な倫理的視点の
「網の目」の中で

人間と世界の関係——コスモロジー

2

コスモロジーの変遷

● 共時的 (synchronic) 視点から、通時的 (diachronic) 視点へ。

3

地球中心主義の終わり

● 地動説革命

- 17世紀、コペルニクス、ガリレオによる。
- 天動説の聖書の根拠:「日よ、とどまれ、ギブオンの上に」(ヨシュア記10:12)。

● ニュートンの万有引力の法則は、天と地を同じ法則によって統一した。

人間中心主義の終わり

● 進化論革命

- 19世紀、ダーウィンによる

● ワトソンとクリックによるDNAの二重らせん構造の発見(1953年)

- 生物の構造を分子レベルで解明することが可能となってきた。

● 自然の一部に位置づけられた人間

- 霊長類に対する知識の増大

5

無限な世界という幻想の終わり

● 地球環境の有限性(資源・大気)を認識するようになる。

- 1962年、レイチェル・カーソン『沈黙の春』
- 1973年、第一次石油ショック
- 1997年、地球温暖化防止京都会議
- 2008年、G8北海道洞爺湖サミット

- 2050年までに世界全体のCO₂排出量の少なくとも50%の削減を目指す

6

新たなコスモロジーの必要性

- 人類は進歩(進化)しているのか？
 - レイチェル・カーソン「こん棒をやたらとふりまわした洞穴時代の人間にくらべて少しも進歩せず、近代人は化学薬品を雨あられと生命あるものに浴びせかけた。…《自然の征服》——これは、人間が得意になって考え出した勝手な文句にすぎない。生物学、哲学のいわゆるネアンデルタール時代にできた言葉だ。

7

責任論

- 責任
 - 倫理的行為の根拠として。他者への応答可能性。
- 生命倫理と環境倫理の反転関係
 - 生命倫理は「自己決定」を**拡大**し、環境倫理は「自己決定」を**縮小**する。
 - 生命倫理は「人格」を**縮小**し、環境倫理は「人格」を**拡大**する。
- 「自己決定」による責任の限界
 - 過去の戦争責任
 - 未来世代に対する責任

8

ヴァーチャルとリアルの間

- 情報化社会の未来
 - 倫理的な遠視状態。
 - 膨大な情報の前で無力化する責任能力。
- ケータイ文化が象徴する社会の変容
 - 浮遊する自己をつなぎとめてくれる「つながり」
 - 責任(リスク)を追うことからの逃避(匿名性)
 - 既存の社会システムに対する抵抗の可能性



9

無関心との戦い

「愛の対極にあるのは憎しみではない。無関心である。美の対極にあるのは醜さではない。無関心である。知の対極にあるのは無知ではない。それもまた無関心である。平和の対極にあるのは戦争ではない。無関心である。生の対極にあるのは死ではない。無関心、生と死に対する無関心である」(エリ・ヴィーゼル)。

10